



Data	
監督・脚本:	ジェイソン・ライトマン
原作:	マット・バイ
出演:	ヒュー・ジャックマン/ヴェラ・ファーミガ/J・K・シモンズ/アルフレッド・モリーナ/サラ・バクストン/マムドゥ・アチー/ジョン・ベッドフォード・ロイド/ビル・パー/ケイトリン・ディーヴァ/モリー・イフラム/ジョシュ・ブレナー

👁️👁️ みどころ

日本では総理大臣の姿や総理総裁への闘いの道を描いた映画はほとんどないが、アメリカでは、リンカーンやケネディを主人公にした映画は多い。『LBJ ケネディの意志を継いだ男』(16年)や『バイス』(18年)等もある。

本作の「フロントランナー」とは1988年の大統領選挙で民主党候補として先頭を走っていたゲイリー・ハートのことだが、“ケネディの再来”と言われた彼が“抹殺”されてしまった“たった一つの報道”とは？

政治家には政策とビジョンが必要。それを語る熱き情熱も必要。他方で、カネはもちろん、酒、女、バクチはダメで、クリーンが不可欠だが、その程度は？ケネディは？クリントン大統領は？なぜ、ゲイリー・ハートだけが？

近時のパワハラ発言で辞職した泉房穂明石市長と対比するのも一興だが、本作で考えるべき本筋はあくまで政治家VSマスコミの在り方だ。さて、あなたの考えは？

■□■あの時の大統領選挙は？本作は“観るべき映画”！■□■

2016年11月のアメリカ大統領選挙は、本命視され、初の女性大統領誕生と噂された民主党のヒラリー・クリントン候補が、共和党の泡沫から候補者にまで登りつめたドナルド・ジョン・トランプ候補に敗れるという、ものすごい政治ドラマを生んだ。当時の私はたまたま胃ガンの手術で入院していたため、連日連夜TV報道されるニュースをベッドの上でくい入るように観ていた。他方、1961年のジョン・F・ケネディ大統領の登場は、私が愛光中学に入学する直前だったこともあり、校長からケネディ大統領を絶賛する話を何度も聞かされたことをよく覚えている。議院内閣制の日本では総理大臣は国会議員の中から国会で指名されるもので、国民の直接投票によって選ばれるものではない。しかし、大統領制のアメリカでは、大統領は国民の直接選挙

によって選ばれるシステム（もっとも、正確には代議員制と選挙人制という訳のわからない制度があるため、真の直接選挙ではない）だから、4年に1度（中間選挙を入れると、2年に1度）の大統領選挙は実に面白い。

しかし、原題も「The Front Runner」、邦題も「フロントランナー」とされた本作は、冒頭に1984年の大統領選挙の様子をダイジェスト的に流した後、1988年の大統領選挙に向けて、フロントランナーのように飛び出していった、民主党の大統領候補ゲイリー・ハート上院議員（ヒュー・ジャックマン）の姿を描くものだ。「アメリカ・ファースト」を唱えるトランプ大統領の登場によって、昨今のアメリカは民主主義のあり方そのものが問われている。また、大手マスコミの報道を真正面から「フェイクニュース」と攻撃するトランプ大統領の“マスコミ観”によって、昨今のアメリカは、改めて政治家VSマスコミ報道のあり方が問われている。そんな時代なればこそ、本作は必見。そこまでの対比は難しいとしても、本作は民主主義の勉強という観点からも、一般教養の面からも、“観るべき映画”だ。

ところが、残念ながら映画館の中はガラガラ。本作の上映は、先週はラストの1回だけだったし、今週からは朝一番の1回だけだから、かなり冷遇されている。しかし、それは如何なもの？ そんな現実は何とも情けない限りだ。

■□■なぜ今、ゲイリー・ハートを描く映画が？■□■

日本では総理大臣を務めた人を直接取り上げる映画は少ないが、アメリカではリンカーン大統領やケネディ大統領を描いた映画は多い。また、近時は『LBJ ケネディの意志を継いだ男』（16年）としてジョンソン（副）大統領を描く映画が登場したし、4月5日からは「世界をメチャクチャにした悪名高き副大統領、その名はディック・チェイニー」という触れ込みで、ブッシュ大統領時代の副大統領だったチェイニーを描く映画『ハイス』（18年）が登場する。しかし、なぜ今、1984年と1988年の大統領選挙で「フロントランナー」になったゲイリー・ハートを描く映画が？

本作でゲイリー・ハート役を演じたヒュー・ジャックマンは『X-MEN』シリーズのウルヴァリン役として有名だが、その他にも『レ・ミゼラブル』（12年）（『シネマ 30』48頁）、『グレイテスト・ショーマン』（17年）（『シネマ 41』未掲載）、『プレステージ』（06年）（『シネマ 13』367頁）等々有名なおอสเตรเลีย出身のハリウッドスター。たしかに、彼は端正だし、ケネディ大統領とよく似た風貌からも、1968年生まれという年齢からも、1984年の大統領選挙に47歳という最年少で立候補し、旋風を巻き起こしたゲイリー・ハート役にピッタリだ。しかし、私が言っているのはそういう問題ではなく、なぜ今、30年以上前の大統領選挙におけるゲイリー・ハートを描く映画を作ったのかということだ。本作のチラシに書かれている“たった一つの報道”とは一体ナニ？そう、本作はそれを考えるために、今作られた映画なのだ。

■□■ケネディはOK。クリントンもパス！だが、この男は？■□■

世の中にはいつの時代にも、わかったようなわからないような不文律があり、マスコミもなぜかそれを守っているものだ。映画界でのその1つは、例えば「吉永小百合は悪く言わない」とい

うもので、昔からいくら歌や演技が下手クソでも、それを叩くことは不文律だった。そして、それは今なおちゃんと続いている・・・？それと同じように、アメリカではケネディ大統領は国民に夢と希望を与える存在だから、多少の女性スキャンダルがあっても、それを暴いたり悪く報道するのはダメ！そういう不文律があった。そのため、マリリン・モンローをはじめ、多くの女性たちと浮名を流したケネディ大統領の不倫報道がなされることはなかった。ところが、本作にみるゲイリー・ハート候補の場合は・・・？

また、ヒラリー・クリントンの夫で1993年から2001年まで大統領を務めたビル・クリントンは、実習生ルインスキーとの“不適切な関係”が報道されたため窮地に立たされ弾劾裁判にかけられたが、妻であり後に大統領選挙に立候補したヒラリー・クリントンの「寛大な援護」もあって、有罪評決に必要な2/3には達せず、かろうじて大統領罷免は免れた。また、私は全く知らなかったが、本作のパンフレットを読めば、1992年の大統領選挙では、民主党候補だったビル・クリントンと歌手フラワーズとの不倫がキャンペーン中に明らかになったが、1988年の大統領選挙で民主党の有力候補だったゲイリー・ハートを不倫報道で潰してしまった反省がメディアにあったため、妻ヒラリー同席の謝罪会見を行って、その後キャンペーンを続けたクリントンが、一般投票では43%という史上最低に近い得票率ながら、「勝者総取り制度」に救われて大統領に選出されたようだ。したがって、ビル・クリントンは2度も女性スキャンダルを無事にパスした稀有な大統領ということになる。

しかし、ゲイリー・ハート候補の場合は、この程度(?)でアウトに？そりゃ、いかにも理不尽では？

■□■ワシントン・ポスト紙VSマイアミ・ヘラルド紙■□■

本作導入部では、飛行機の中でハートとそのスタッフが、少し空いた時間を、ワシントン・ポスト紙の記者A.J.パーカー(マムドゥ・アチー)のインタビューに充てるシークエンスが登場する。第90回アカデミー賞で作品賞も主演女優賞も逃したものの、1971年のペンタゴン・ペーパー事件と1972年のウォーターゲート事件を描いた『ペンタゴン・ペーパーズ』(17年)は素晴らしい問題提起作だった(『シネマ41』37頁)。その主人公の一人はワシントン・ポスト紙の社主キャサリン・グラハムで、もう一人は編集主幹のベン・ブラッドリーだった。ちなみに、私の大好きな『大統領の陰謀』(76年)も、ワシントン・ポスト紙の記者たちがウォーターゲート事件の取材に大活躍する映画だった。

『ペンタゴン・ペーパーズ』は、ニューヨーク・タイムズ紙が1971年6月13日の一面に掲載した、4人の大統領トルーマン、アイゼンハワー、ケネディ、ジョンソンがベトナム戦争に関する嘘をつき、マクナ马拉が1965年にはすでにこの戦争には勝てないと知っていたことを明らかにする記事を読んで、ワシントン・ポスト紙の編集責任者が歯ざりして悔しかったところから、本格的ストーリーが展開していった。すると本作では、ワシントン・ポスト紙の政治部副編集長のアン・デヴロイ(アリ・グレイナー)らは、マイアミ・ヘラルド紙がスッパ抜いたハートの不倫スキャンダル記事を見て、いかなる反応を？

マイアミ・ヘラルド紙が動いたのは、ワシントン・ポスト紙の記者がハートに対して女性スキャンダルについてジャブを出して尋ねたところ、「いつでも追跡調査しろ。何もないことがわかるから。」と反撃されて引き下がったためだった。一流紙たるワシントン・ポスト紙は不倫スキャンダルの情報集めなんかのために動かないが、地元の地方紙にすぎないマイアミ・ヘラルド紙なら、そんな下ネタ集めでも頑張らなくちゃ、というわけだ。

しかして、マイアミ・ヘラルド紙のトム・フィドラー（スティーブ・ジシス）とピート・マーフィー（ビル・パー）が、マイアミ空港に降りてくる“それらしき美女”を探していると、そこにドナ・ライス（サラ・パクストン）が登場してきたから、フィドラーとマーフィーの予想は見事に的中！急いでカメラマンを呼び、ハートの自宅の前に車を停めて張り込みを続けたが、迂闊なことに、途中少し居眠りを。さあ、ハートは自宅の中で、あの美女と一体どんな時間を過ごしていたの？玄関前のツーショット写真だけで“不倫スキャンダル”の記事にできるの？裏付け調査が必要なのでは？そんな、さまざまな葛藤の中、多少フライング気味ながらフィドラーとマーフィーの書いた記事がマイアミ・ヘラルド紙に載ったが、さて、その反応は？

■□■1988年はこれで不倫！2019年はこれでパワハラ！■□■

クリントン大統領の“不適切な関係”のお相手とされたルインスキーも美人だったが、本作でハートの不倫相手とされたドナ・ライスは相当な美人。もちろん、本作をそんなスケベおやじ的な目で見るのはダメなことはわかっているが、これほどの美女なら、47歳のハートがそそれらたとしても、むべなるかな・・・？

それはともかく、本作では何よりもマイアミ・ヘラルド紙が不倫と決めつけた、ハートとドナとの関係（実態）をしっかりと確認する必要がある。といっても、マイアミ・ヘラルド紙の記者フィドラー、マーフィーはドナがマイアミにあるハートの自宅に入ったのを目撃し、写真を撮っただけ。もっとも、その後の更なる調査で、ハートは週末のある海辺で、豪華ヨットのクルーズに数名の美女と共に乗り込んでいる姿が目撃されていたが、それだって、ただそれだけのこと。不倫の決定的証拠は何も挙がっていないし、ハート本人は完全に否認していたから、ハートがそのまま頑張れば、人のうわさも〇〇日とやら、になる可能性も十分だった。しかして、1988年当時の、不倫スキャンダルになるかならないかのボーダーラインは？

ちなみに、日本では2019年1月、弁護士でもある明石市の泉房穂市長が、パワハラ発言によって辞職するという事件が発生した。ICレコーダーには、市長の「火付けて捕まってこいおまえ。燃やしてしまえ。損害賠償を個人で負え。」等の発言が入っていたため、それが報道されると、非難は一斉に市長に向けられた。しかし、その後の神戸新聞の「詳報」によって、録音の後半には「市民の安全のためやろ。私が行って土下座でもしますわ。」等の発言が入っていたことが明らかにされると、その後、市役所に寄せられる電話やメールは批判から擁護に一転したらしい。泉前市長が記者会見で辞職を表明した2月1日、市役所には421件の意見が寄せられたが、批判が56件に対し、擁護が341件と大きく上回ったそう。つまり、後半の発言を考えると、前半の「火をつけてこい」発言は職務熱心のあまりに行き過ぎたもので、パワハラとは言

えないのではないかと、という泉市長の擁護論が有力になってきたわけだ。それに対して、パワハラ防止を訴える“識者”たちは、「仕事熱心のため」という目的の正当性はパワハラのは是非には無関係という論理で反論しているが、さて・・・？

もし、この発言が1988年当時だったら、そもそもその当時にはパワハラという言葉自体がなかったから、この発言が問題にされることはなかったはず。逆に、2019年の今なら、ハートのマイアミでの行動はそれだけで不倫スキャンダルになること確実だが、1988年当時では、それは少し厳しすぎたのでは・・・？

■政治家に求めるのは政策実行力？それともクリーンさ？■

政治家は“公人”だから、プライバシーが制約され、私生活でもクリーンさが求められるのは仕方ない。したがって、カネはもちろん、酒、女、バクチには用心しなければ。そう考えると、カネはもちろん、酒、女、バクチで失敗した政治家は、バクチでのハマコーこと浜田幸一等々、日本にもたくさんいる。ちなみに、「代議士になったら、まず料亭に行ってみよう」と発言し、せっかくの政治家への道をおじゃんにしたバカ者が杉村太蔵だ。また、かつて自由党と民主党の保守合同を成し遂げた三木武吉は、対立候補から「戦後男女同権となったものの、ある有力候補のごときは妾を4人も持っている。かかる不徳義漢が国政に関係する資格があるか」と批判されると「私には妾が4人であると申されたが、事実は5人です」と反論したのは有名な話だ。さらに、松本清張の原作を野村芳太郎監督が映画化した『迷走地図』（83年）では、勝新太郎が演じた通商産業大臣・寺西正毅は、料亭で堂々と女を抱いていたが、あの時代にはあんな風景は日常茶飯事だったのだろう。しかし、今どき安倍晋三総理がそんなことをしている姿が発見されれば、即離婚、即辞職は必至だ。

本作を観ていると、ゲイリー・ハート候補が政策について熱心に語るのが大好きな人間であることがよくわかる。このあたりは、ぼつと出の杉村太蔵議員とは大違いで、その方面への熱き情熱は絶賛もの。こんな政策への意欲や政策立案能力こそ、政治家に求められるものだ。ちなみに、1984年選挙の時の彼のスローガンは「ニュー・アイディア」だったが、その実態が不明確だったこともあって、対抗馬のカーター政権当時の副大統領であったモンデール候補から「実質はどこにある？ ("Where's the beef?")」とTVコマーシャルをもじった批判を展開され、民主党の候補者指名をモンデールに逆転されたそう。その反省もあって、1988年選挙でのハート候補は、最初からフロントランナーだったばかりでなく、政策面での理論武装も万全！私生活においては妻のリー・ハート（ヴェラ・ファームガ）と別居していたが、そんなことは大統領選挙とは無関係。ハートはあくまでそう考えていたし、もちろん、金、酒、女、バクチに関して俺には何の心配もなし。選挙参謀のビル・ディクソン（J.K.シモンズ）や副参謀のジョン・エマーソン（トミー・デュエイ）をはじめ、ハートの選挙活動に結集する面々は全員そう確信していた。ところが、たかがあの程度のこと（？）が、不倫スキャンダルに！？

2019（平成31）年2月25日記